



幼児と音楽

山下俊郎

この半年ほど住宅の都合でその両親と同居している孫の日常を観察していると、いろいろと自分の子どもについて気づいていたことを再認識したり、また新しい事がらに気づいたりする。孫はちょうどお誕生に近い頃から音楽に対してひじょうにはつきりした反応を示すようになった。私の子どもについての観察記録によると、十一月でラジオ体操の音楽に合わせて身体をリズムカルに動かして居り、一才ちょっとすぎには歌ってやると声を出してハミングみたいなことをやっているのです、おおよそ一才ごろからこのような音楽に対する反応は出てくるものと考えられる。ゲゼルによると、一才半で自発的にハミングしたり、語節を歌ったりする、また音楽を聞いていると全身でリズムカルに反応するとされている。

孫は十一月で歩きはじめているが、ラジオや蓄音器の音楽をきくと二通りの反応をする。音楽がきこえはじめるるとラジオの前にベタンとすわりこんで上体を前後に動かしながらリズムカルな運動をするのが第一の型であり、第二の型は歩きまわりながら上体を前後に動かすリズム運動をするのである。ところが、昨日はまた新しい反応を示した。家中の者で、ケンプの奏するベートーヴェンのピアノコンチェルト四番のレコードを聞いている

とき、母親の膝の上におとなしく抱かれていた孫は、フォルテの所へくると両手をふりあげ身体全体を動かしてまさに指揮者のような動作をするのである。私共はほほえみながらこれを見ていたのである。

このような小さな幼児の音楽に対する反応は、いうまでもなくリズムに対する反応である。そして、いままで多くの人々が観察しているように、発達的に見て音楽に対する最初の反応はリズムに対するものである。さらにまたリズムに対する反応でも、リズム型の単純な、そしてはつきりしたものに対する反応がよりはつきり現われる。しかし、いずれにしても、リズムに対する反応は、幼児期の可なり早い時期にはつきり現われるということ。私達は注意すべきであると思う。

リズムに対する反応はこのような次第で可なり早くから見られるが、メロディに対する反応もすでに前に述べたゲゼルのいうように一才半頃からハミングしたりすることに現われている。したがって音楽に対する子どもの反応は、可なり早くから現われているのであって、音楽に対する子どもの心はずいぶん早くから芽生えていることを私達は知るのである。

このようにして芽生えてくる音楽に対する子どもの心の動きは、恐らく西洋の子どもでも日本の子どもでも変わらないものであると考えられる。私達は外国の子どもについて記載されているのと同じことを、わが国の子どもについても発見するからである。ところが、この尊い芽生えがまっすぐに育てられない所に問題がある。

子どもの心に音楽を育てるのに一番大切なのは、環境である。環境の高さに応じて子どもの音楽に対する心も高められる。このようなことを考える場合に、私達にとつて最も残念なのは、現在のわが国の音楽的環境である。現在子ども達の周囲に流れている音楽は、何ともいいようのないくらい情ないものである。いわゆる流行歌というものが、子どもの周囲に流れている、そしてそれがもてはやされる。流行歌手的な誠にいやな歌い方が、いわゆる童謡歌手にまでしみとおっている。いわゆる音楽家、作曲家という人々が、それで通っているのが何とも情ない。

数年前に文部省で幼稚園のための音楽、リズムの指導書を作る委員会に関係した際に、私も現代の日本の最高の作曲家で文部省の視学官として音楽教育の指導に当たっていて下さる諸井三郎氏の指導のものにいろいろと勉強させて頂いた。その際に、幼稚園の歌唱教材を蒐集して選択するというにも可なりの時を費したのであるが多くの資料を集めると、ほんとに幼児に適する教材というものが少ない。よく歌われているような歌でも吟味してみると声域の点で幼児に無理なものが多いのである。いろいろの条件を限定してみると、ほんとに幼児に歌わせたい歌が少ないのである。しかも、外国のこの種のものを見ると、単純で、健康で、美しいものがひじょうにたくさんある。わが国のものは変にひねくりまわしたようなもの、しかも幼児に無理なような形にひねくりまわされたものが多いのである。そしてこの中で、私にとってひじょうに嬉しく感謝したことは、滝廉太郎氏作曲にいいものがあつたことである。これは私達の子どもの時分にも歌つたものであるが、「水鉄砲」「鳩ポッポ」というようなものが、滝氏の作曲であることを私ははじめて知つたのである。子どもに見せるいわゆる童画を描く童画家には、まともな絵がかけないから童画家になつたというような人々があると聞いて居り、童画家はいわゆる画家よりも一段低い序列にあると考えているような人々があるとも聞いている。情ない話であるが、これとおなじようなことが、童謡の場合にも考えられているのではないかとひがみたくるのであるが、もつと音楽家が子どものことを考えてくれてもいいのではないかと、滝廉太郎のようにいい歌を子どものために作ってくれる人があつていいのではないかと私達は考えざるを得ないのである。

このようなことをいろいろと考えてみると、私達は幼児に与えるいわゆる文化財というものの全体について考えるのと同じことを音楽についても考えざるを得ない。その第一は、幼児保育者自身の音楽に対する教養を高めることである。さきにもふれたように幼児の音楽に対する心をまっすぐに育てるためには、幼児の生活する環境に豊かな高い美しい音楽をみなぎらせることである。そしてこのことを実現するには、どんな音楽を子どもの周囲に流したらいいか、ということについて、十分に選択のできるだけの広いそして高い音楽的教養が身につけてい

る幼児保育者であつてはじめて幼児のためのよい音楽的環境を作ることが出来るわけである。したがつて幼児保育者は、まず自らの音楽的教養を高めることに、何よりも大きな努力を払わなければならないことになる。自ら気づかずして低い卑俗な音楽的環境を作ることのないようにして欲しいのである。

次にさらに第二に、もう一つ望みたいことは、できるならば自ら幼児に与える文化財をつくり出すということをして欲しいことである。幼児保育者は世の中の誰にもまして幼児をよく知る人々である。幼児の生活に即した幼児の生活に根をおろした。そして幼児に最も適した音楽を作るといふことは、幼児保育者のみができるはずのことなのである。しかし、それは音楽的才能を十分に恵まれた人のみができることだといふ人があるかも知れない。たしかにそうではある。けれども私はすべての幼児保育者にそうして欲しいといつてゐるのではない。そういう子どもの為のいい文化財を作る人が、幼児保育者自身の中から出てほしいと願うのである。そしてそのためには、さきに述べた第一の条件である幼児保育者の音楽的教養を高めるといふことが、その前提になることをもう一度考へるべきであらう。

子どもが小さいうちに持つてゐる芽生えを十分に美しく健やかにのびるように力を注ぐといふことは、幼児保育者のつとめである。すべての芽生えがそうであるが、せつかく持つてゐるいい芽生えがのびることをおさえられたり、ゆがめられたりすることがあまりにも多い。音楽に対する子どもの心もまさにその一つである。これをスクスクとのばしてやるために幼児保育者はもつとつとめるべきであらう。